

音読による授業構成の試み (2)

—新美南吉『良寛物語』—

渡辺和靖

Kazuyasu WATANABE

社会科教育講座 (思想史)

An Approach to the Construction of Class by Oral Reading

— NIIMI NANKICHI as an Example —

Kazuyasu WATANABE

Department of Social Studies Education (Intellectual History)

はじめに「音読による授業構成の試み⁽¹⁾」を実践する場合、授業(講義)を受ける対象によってテキストのレベルを配慮する必要性について指摘しておきたい。

テキストのレベルについては2つの要因を考慮することができる。1つは言葉や表現であり、もう1つはその内容である。

テキストの言葉や表現については、古典文と現代文とでは難易度が異なることは言うまでもない。例えば樋口一葉や森鷗外など明治の文章は読みにくい。これは容易に見分けることができるし、ルビ(ふりがな)を多くするとか、教師が読んでその部分を学生に反復させるなどの対処法がある。

これに対して内容の難易度についてはよほど注意する必要がある。

大学院の授業で梶井基次郎の名作「檸檬」に至る習作を制作順に読んだ時、その曲がりくねった自己分析の過程を描いた作品群が興味深いという肯定的な評価を得た。ところが、これを学部で2年生で取り上げたところ、退屈で面白くないと不評であった。

対象となる学生のレベルによって、取り上げるテキストもそれに合わせたものにすることが、授業を成功させるための必須条件となる。

ここでは、新美南吉の『良寛物語』を取り上げる。『良寛物語』は南吉が年少者を対象として執筆したものであり、音読教材としては典型的な入門篇である。表現はわかりやすく、内容的にも教訓的なものを多く含んでおり、中学生や高校の「道徳」の教材として使用することも充分可能であると考えている。そして同時に、新美南吉の思想を考えるうえでは重要な作品であり、そのような観点から大学の講義において取り上

げるのにも不足はないものである。

所要時間数としては、2ないし3時間。ラインで囲った部分は、あらかじめ通し番号を付して印刷し、資料として配布し、学生に音読させながら授業を進行させることになる。ただし2～3行のごく短い部分は教師自身が音読するのがいいだろう。また歴史的な資料など、少し難しいと思われる部分も教師が音読するのがいいだろう。

I 執筆依頼

新美南吉は1913(大正2)年に愛知県半田市に生まれた。

南吉は東京外国語学校時代から創作を開始し、詩や小説や童話を雑誌などに投稿してきたが、その多くは日記やノートに原稿のまま残され、社会的に注目されることはなかった。南吉が注目されるようになるのは、初の単行本である『良寛物語 手鞠と鉢の子』が出版された1941(昭和16)年の末頃からである。この作品は初版1万部で広く流布した。しかし現在、南吉研究は盛んになりつつあるが、『良寛物語』についての研究はあまりない。

『良寛物語』は1941年1月4日から9日にかけて執筆され、同年10月1日付けで学習社から「学習社文庫」第1巻として刊行された。『校定 新美南吉全集』(大日本図書株式会社, 1980年)第1巻の「解題」に以下のようにある。

学習社文庫は、一九四一年の一〇月一日から刊行を開始したシリーズで、学習社の創立当時の代表者西村辰五郎の署名による「学習社文庫発行の言葉」(昭和一六年九月付)によれば、「愛国の

情熱に燃える学者諸先輩に懇請して」企画され、「(一) すべて書下ろしの、(二) 高度の知識をやさしい言葉で、(三) 興味津々たる、(四) 挿絵を豊富にし、(五) 極度の廉価版で、以上の五項をモットオとして、皇国民錬成に必要な一大文化文庫」をめざしたものとされている。

この作品は雑誌社の依頼により執筆されたものであり、執筆動機は必ずしも主体的なものではない。しかし、南吉はこの依頼に意欲的に取り組んだ。1月5日の日記に「昨夜から、「良寛さん」を書き出した。今日で二七枚になった。今までのところ好調」とある。

冒頭の「この本のはじめに」という文章で、南吉は「良寛といふ名前の坊さんが、今から百五十年ぐらゐ前に住んでゐた」と書き始めている。

ところで、この本に書かれてある良寛さんは、偉かつたらうか。

なる程、大人達は良寛さんを偉かつたといつてゐる。(中略) こんな乞食のやうな坊さんが偉いのなら、そのへんの乞食やルンペンは、みんな偉いちやないかといふ者があるかも知れない。

南吉は、大人たちが偉いと言っている良寛が、はたして本当に偉いのか、どこが偉いのか見てみようじゃないかと読者に語りかける。

さうだ、ひよつとすると君達の方が、すばやくほんたうの良寛さんの偉さを、見ぬいてしまふかもしれない。大人達が気がつかないでゐることを、君達の方が先に解つてしまふかも知れない。

大人たちの作った既成概念に囚われることなく、子ども自身の力で良寛の偉さを感じ取って欲しいと南吉は願う。

老人になつた良寛さんの話ばかりが残つてゐて、良寛さんが子供だつた時分は、どんな風だつたかといふ話は、まるで残つてゐない。(中略) 良寛さんの子供時代は多分こんな風だつたらう、こんなことがあつたらうと想像して、その話を君達にしてあげよう。

資料が少なく従来あまり記述されることのなかつた良寛の少年時代についても、想像力を働かして描いてみたいと南吉は抱負を語っている。そこには南吉の童話〈久助君シリーズ〉の経験が生かされている⁽²⁾。

II 「蔵の中」

その出雲崎^{いずもぎ}の町に、数十代前から続いて来てゐ

る、由緒正しい一軒の家があつた。土地の人達は橘屋^{たちばなや}と呼んでゐた。橘屋は何代も前から、土地の名主と神官と両方のことをして来た。土地の人達は橘屋を尊敬してゐた。(中略) 橘屋に男の子が生まれた。家の人々は喜んで、栄蔵と名をつけた。

南吉は資料に基づいて、良寛の生まれた家について記述する。

ある日、栄蔵がお寺に遊びにいき、みんなが騒いでいるのを眺めている場面である。

まだ七つばかりの栄蔵は、春も近い暖い日、近所のお寺へ遊びにいつてゐた。

子供達は十人ばかり、お御堂の前の、陽のあたる階段に腰かけて騒いでゐた。栄蔵はいつもの癖で、みんなから少し離れたところで、優しい眼をしてみんなの方を眺めてゐた。しもやけのまだすつかり癒らない小さい手は、することがないので前垂の下へ入れて。

角ちゃんが佐渡ヶ島の話をしているのを、栄蔵が熱心に聞いていた。本当はお母さんの故郷のことが聞きたかつたのである。

「佐渡に相川つて町があるでせう。」

さういつてききたかつた。その言葉が、のどの所まで来てゐたが、そこでいざとなるととまつてしまふのである。といふのは、いつも栄蔵はみんなと話をしなかつた。何か話をしかけると、みんなは栄蔵の言葉に笑い出すのであつた。その言葉が、女みたいだとか、のろくさくしてゐるとかいつて。

大家の跡取り息子でありながら、孤独で夢見がちな少年として、南吉は良寛を描いている。西郡久吾の『北越偉人沙門良寛全伝』(1914年、目黒書店)——以下『全伝』——に、栄蔵の母秀子は「山本氏佐州相川山本庄兵衛の女にして当家の姪なり」とあり、南吉はこうした史実を取り入れ、空想を拵げながら、母親の故郷佐渡を恋する少年を造形したのである。

栄蔵は、みんなに「鐘撞いて見ろ」といわる。

鐘を撞くと、船にのつてゐるれふしや畠に出てゐる百姓達が、弁当を喰べる時刻を間違へるので、ひどく叱られることを栄蔵はよく知つてゐた。しかし今ここでいやだといへば、意気地なしに定められてしまふのだ。そいつはいやだ。あとはどうなつても構はない、やつてしまはう。

栄蔵は、鐘を撞くことを決心する。

7, 8回撞いたとき、坊さんが飛び出してきた。子ども達は一目散に逃げるが、栄蔵だけが逃げ遅れてしまう。

お寺の小僧さんに連れられて栄蔵は家に帰ってきた。

「そいぢや、今さつき鳴つた鐘は、お前がついたのか。」

とお祖父さんが、今日は厳しい顔できいた。長い間名主なぬしをしてゐたお祖父さんは、酒呑みのれふしがおかみへ納める税金を持つて来ないときに、かういふ顔でねめつけることを栄蔵は知つてゐる。

お婆さんは栄蔵が悪戯をするほど元気なことをよるこんでゐる。

「随分よう響いたぢやないかえ。栄坊にほんな力があるなら、何も弱虫ぢやないよ。心配することなんかありやしないよ。」

と嬉しさうにいつた。

「あんたは黙つてゐなさい。」

とお祖父さんは、お祖母さんをたしなめた。今は喜んでゐる場合ではない。

しかし、一家の主としてお爺さんは栄蔵を叱らなければならぬ。

この橘屋では、何十年の間、子供をこらしめるといふようなことは無かつた。お祖父さんには子供が一人もなくて、栄蔵の父も母も、よそから貰はれて来た養子だつたからだ。(中略)お祖父さんは、眉をしかめながら、ここの家で子供がこらしめられた例をさがしてゐると、六十年ばかり前に、さういふ例がただ一つあつたのを、やうやく憶ひ出した。

栄蔵が育つたのは、子どもを叱るような雰囲気がつたかない家庭であつた。南吉は、良寛のような人物が現れるためには、良寛という個人を超えた、長い家族の歴史があると感じたのである。

栄蔵は、土蔵に閉じこめられることになつた。おそらく土蔵に閉じこめるといふのは、当時普通におこなわれていた罰であつたであらう。

かそかに聞えて来る波の音のほか、外からは何の物音も伝はつて来ない。ちき近くの家にある筈の、お父さんやお母さんやお祖父さんお祖母さんも、何処か遠くの、別の世界へ遠のいていつてしまつたやうに思へる。

なるほど寂しい。このまゝいつまでも、ここに

ゐなきやならないとしたら、どんなだらう。お祖父さんはきつと、間もなく開けに来てくれるだらうけれど、もしかみんなが栄蔵のことを忘れてしまつて、出してくれなかつたら、どういふことにならう。

栄蔵が泣くのを止めたのは、蔵の2階にある本箱を思い出したからである。難しい漢字の並ぶ中、知っている字があれば、「そこだけ読んで嬉しく」なり、「はやくそれが読めるようになりたい。そして、自分の知らない沢山のことを知りたい」と思い、自分が罰を受けてゐるのも忘れ、本に夢中になつてしまつた。心配になつたお祖父さんが、土蔵の2階でそれを見た。

お祖父さんは、小さい栄蔵のうちに、学問を好む一つの魂の芽生えを見たのである。お祖父さんにはそれが嬉しかつた。——代々橘屋は学問を愛して来た。この子もまたそれを受けついで愛してゆく。かうして橘屋の将来は、いつまでも輝かしく発展するのだ……。

Ⅲ 「鹿の子」

ある春の日、家の中の襖が取り外された。栄蔵は下男ひまらの松さんに何があるのか聞いた。「お日待」のために、漁師たちが集まつてきた。

れふしたちは、平生浜べでどな嘯鳴りあつてゐるときとは打つて変つて、馬鹿でいねいな物腰で、四角ばつて挨拶をした。栄蔵は見てゐてをかしかつた。きつと、いつも裸ん坊でゐるのが、よそ行きの着物をきたから、窮屈なんだらう、と考へた。よそ行きの着物といつたつて、れふしたちのは、普段着とどれ程も変つてゐない、厚ぼつたい手織の木綿であつた。

栄蔵は、お使いに出かける松さんについて酒屋に行つた。その帰り道、四斗樽を抱える松さんの後を栄蔵が歩いていく。帰り道、松さんは酒屋で一口酒を振る舞われて、上機嫌。栄蔵は、一心に通帳に集中してゐた。「さけ」という字が読めたが、それからあとが読めないうちに家に帰り着いた。

すると奇妙なものが、庭の柿の木につないであつた。初め栄蔵は、犬だと思つて何気なく通りすぎようとした。しかしそれは犬ではなかつた。犬にしては、肢あしが細く長すぎた。そして耳が大きい割に、顔が細くとがつてゐた。

栄蔵は近寄つて見た。それは犬のやうな険悪な目ではなく、円な眼全体が、青みを含んだ黒で、

いふにははれぬ優しさをたたへてゐた。

「奇妙な」という言葉を南吉はよく使う。2年前に執筆された「久助君の話」では、友達の兵太郎くんが見たこともない少年に見える「奇妙な」錯覚、1年前に執筆された「嘘」ではおたふく風邪で5日休んだ後に学校へ行ったときの「奇妙な」錯覚が描かれている。

近所の小父さんにそれが「鹿の仔」であると聞いた栄蔵は、近所の子供たちに、見においてよと誘う。

—なアんだ、ただの鹿の仔ぢやないか、と金ちやんと勝ちやんは、つまらなく思つた。そして何故栄蔵が一生懸命になつてゐるのか、わけがわからなかつた。(中略) 栄蔵はそれが可愛くてたまらなかつた。(中略) いつまで見てゐても栄蔵には可愛く思はれた。

しかし他の三人は、ただ見てゐるだけではつまらなかつた。

つまらなくなつた子供たちは鹿の子を虐め始めた。それを松さんに頼んでやめさせた。栄蔵は松さんに鹿の子の縄を持たせてもらって、海に連れていったもつた。

どういふわけで海の方へゆくのか、栄蔵は知らなかつた。ただ鹿の仔が従順について来るのが可愛らしかつたので、ふりかへりふりかへり、石に躓いたりしながら、ちき近くの海の汀へ下りていつた。金ちやんと勝ちやんと豊ちやんもついて来た。この子達はこれからどういふことがあるか、もう知つてゐた。

鹿の子を連れて海に行く理由を、他の子は知つていて、栄蔵だけが知らない。

松さんが隠し持つて来た斧をば、薪を割らうとするやうに振りあげたときには、栄蔵はまだ、松さんが何をするつもりなのか、解らなかつた。

だが次の瞬間には、足元の白く乾いた砂の上に、襟巻のやうなものが、おつぱり出されてあつた。それが鹿の仔であつた。(中略)

日頃の^{ひょうきん}剽軽さで松さんは、仔鹿の頭のところに、しやがみこんだ。

鹿は「お日待」の御馳走用に用意されたものであつた。栄蔵にはこの可愛い鹿が殺されるという発想がまったくなかつた。先程みんなのいじめから鹿を守ってくれた松さんがまさかその鹿を何のためらいもなく殺すとは思つても見なかつた。

栄蔵は烈しく動揺する。「これは一体どういふことなのか、よく解らなかつた」。突然、栄蔵は、鳥でも飛び立つやうに、無茶苦茶に西の方へ走っていった。

茂倉利三はこの部分について以下のように論じている⁽³⁾。

罪のないものが人間の欲望のためだけに殺される。人間はそれをなんとも思わない。(中略) 人は教えられなくても、ひとりでにそういうことを学び、同情などというものは生きていく上で邪魔になることはあつても、役にたつものではないことを知つてゆきます。仔鹿を殺した松蔵さんも、歓声をあげた子供たちも、ちやんと人間の生き方を心得ているのです。(中略) 栄蔵はそういう自然な生き方を身につけることができない不幸な少年でした。

しかし、これは南吉の意図を充分考慮したものではない。みなが常識として疑わないようなことにも傷つく少年は、南吉の童話の主人公として何度も登場している。ここで南吉は、あの良寛さんをそうした少年として描いているのである。常識という大人の智慧を疑う少年の智慧をこそ南吉は信頼したのである。そして、そこにやがて出家する栄蔵という手掛かりを残したのである。

灯をとす頃になって、栄蔵は、西の漁師につれられて帰つてきた。「海つぱたの砂の上に寝ころがつて、おおんおおんと泣いたりしました。」

ほんたうに栄蔵の心は痛んでゐた。栄蔵はしみじみ悲しかつた。何といふことがこの世にはあるのだらう。何といふ^{むざん}無慚なことを人間はするものなのだらう。……

嵐のやうな苦しみが、栄蔵の心を過ぎていつたあとだつたけれど、さらにまた繰り返し繰り返し心は痛んだ。

栄蔵はみんなが寝静まつたあとも、しくしく泣いていた。起きてきた母に栄蔵が事情を話す。

「母ちやん、鹿の仔を殺したんです。」

と一声いふと、ふとんの上に木のやうに倒れ、ふとんを嚙んで泣き声を抑へた。(中略) 栄蔵の、涙に疲れた眼の、奥の奥の深い色を見たとき、栄蔵のほんたうの悲しみが、お母さんにわかつた。

お母さんには、もういふ言葉がなかつた。自分も泣きながら、やさしく栄蔵の背をさすつてゐるだけだつた。

ここに描かれた母親は、実の母を幼くして無くした

南吉の、理想の母親像であったと思われる。

Ⅳ 「鰈」

このエピソードは、茂倉利三によると、西郡久吾の『全伝』で初めて紹介されたものあり、良寛の子供時代の唯一のエピソードである。南吉はこれを自らの良寛伝に採り入れた。以下、オリジナルとの相違に注目しながら見ていく。

栄蔵には妙な癖が一つあった。お父さんに叱られたりすると、返事をしないで、上目使ひに相手を見つと見てゐるのである。

それはちよつとした、変な癖だ。しかしどんな癖にもよく考へて見ると、たいてい何か理由があるものである。

栄蔵はその癖がよくないと思ひながらも、なおすことができなかつた。ある日お父さんにたしなめられた栄蔵は、黙って突っ立って、お父さんを上目使いに見ていた。

「何だ。親に向かつてそんな眼をする奴があるか。そんな眼で親を睨む奴は、今に鰈になつてしまふから見とれつ。」

栄蔵は眼を伏せた。何か思ひごとのある時のお父さんから、邪慳な口のきき方で叱られるといつても栄蔵は、情ない気がするのだつた。そしてお父さんが恨めしくさへなるのだつた。(中略)(お父さんは)奥へはいつてしまつた。栄蔵はしばらくお父さんが、うしろに閉めた襖を見つめてゐたが、急に踵を返すと、ぷいと家を出ていつた。

反抗的な栄蔵の姿が描かれている。それは子供を叱ることのない家庭というイメージとは齟齬する。このエピソードを組み込むのに南吉はかなり苦心している。

——きつとほんたうなのだ。して見るとこれは大変なことである。今にも栄蔵の体が、魚屋やれふしがよく売りに来る、あの平たい鰈になつてしまふかも知れない。いや、もうなつてゐるのではあるまいか。栄蔵は慌てて自分の足を見た。幸ひなことにまだ人間の足をしてゐる。しかし、もううかうか遊んでゐることは出来ない。こんな道の真中で鰈になつたら、ちやうど、れふしの魚籠から、はね出した鰈のやうに、砂の上でぺんぺん跳ねてゐなければなるまい。

『全伝』では、このエピソードは、栄蔵がお父さんの言うことを疑うことなく信じたことを示すものとし

て語られている。南吉は、その上に、あえて理性的に判断する栄蔵の姿を付け加えている。

栄蔵は、鰈になつてもいいように、海へ向かつたのである。

栄蔵の鰈なんか、ぱくりと一口で喰べられてしまふだらう。さうすると栄蔵のお父さんや、お母さんは、いつまで栄蔵を待つてゐても、栄蔵は帰つて来ない。二人はどんなにか心配するだらう。(中略)お父さんは殊に、栄蔵をあんなに厳しく叱りつけたことを、後悔されるに違ひない。

栄蔵はお父さんが、後悔されることを思ふと、いつそ鰈になつて、鰐ざめに喰はれて見たいやうな気もした。

はじめは鰈になつたときのことをあれこれ心配していた栄蔵は、そのうち両親のことを心配し始めた。

「何だつて。栄坊がゐない？ そりや変だ。さつき私が叱りつけたから、悲しくなつて何処かへいつてしまつたのだらうか。」「あなたがあんまり強くお叱りになるから、こんなことになるんです。あの子は気が小さいから、優しくいつてきかせなければ、駄目なんですよ。」とお母さんがいふ。(中略)あつちこつちの家を探すが、栄蔵は見つからない。そこで松さんは、とうとう探ねあぐんで海岸へやつて来る……と、栄蔵は、岩蔭にしゃがんでゐて空想した。

栄蔵の家で起こつたことは、大体栄蔵の空想の通りだつた。で、松さんは海岸へやつて来た。栄蔵は松さんとともに家に帰つてきた。

お父さんとお母さんは、しばらく栄蔵の顔を愛情のこもつた眼指でみつめただけで、何もいはなかつた。何もいはなかつたことが、かへつて二人の心配がどれほど大きかつたかを物語つてゐた。栄蔵は両親に気苦労させたことを、すまないと思ひながらも、何か心に満足を覚えた。

この出来事は、その後も長く栄蔵の心に残つた。

そして或日ふつとまたその事を憶ひ出して、つくづく自分の心を、あさましく思つたのは、栄蔵がもう青年になりかけた頃であつた。その時栄蔵は、自分の心の中に、悪いものがあることを判然知つた。

南吉は、このエピソードを、栄蔵の出家の要因の一つとしようと図つたのである。

海への岩蔭に隠れて、日が暮れるまでじつとしてゐたのは、自分を叱つたお父さんに、心配させようといふ下心ではなかつたか。さうなのだ。何といふひねくれたいけない心だらう。叱られた時、何故素直に、お父さんごめんなさいと謝罪れなかつたのだらう。

——私の心の中には、いけないものがある、取り除かねばならない、いけないものがある、と栄蔵は思つたのであつた。

このように、南吉は、既成のエピソードをただ取り入れるのではなく、最後の述懐を付け加えることによって、自らの作品のなかに自然に組み込むことに成功したのである。

V 「紙鳶を買う銭」

栄蔵は14歳になった。長男である栄蔵は、名主職を継ぐため、塾に通うことになった。栄蔵はここでも仲間はずれにされ、同じ仲間はずれの惣兵衛と友達になった。ある日、栄蔵は惣兵衛に紙鳶を見に来るように誘われ、気が進まなかつたが、近所の紙鳶好きの新太郎と見に行つた。

「さうだ、新太郎ちゃんをつれてつてやらう。きつと喜ぶから。」

さう思ひつくと、急に栄蔵は心が弾んで来て、足取も軽くなつて、新太郎ちゃんの家へいつた。(中略) 栄蔵は袴をつけてゐるが、新太郎ちゃんは、いつものとほりの垢だらけの着物で、尻がちぎれて、ぼうぼうになつた草履をはき、背中には頭中おできの出来た赤ん坊を背負つてゐた。

惣兵衛ちゃんの家に着くと、新太郎ちゃんは急に元気がなくなった。惣兵衛ちゃんの家は新太郎ちゃんのお父さんの奉公先だつた。栄蔵は、惣兵衛ちゃんのお母さんとお祖母さんに賑やかに迎えられたが、新太郎ちゃんは全く無視された。

「ありや、家にゐた嘉助の体だね。」

とお母さんがいつた。

「え？ 嘉助の？ うんあの嘉助んとこの餓鬼かい。」と眼鏡をかけたお祖母さんが、まだ新太郎ちゃんから眼をはなさずいつた。お祖母さんは、新太郎ちゃんの垢で汚れて白くなつた足を見てゐた。栄蔵は、ひどいことをいふ人達だと思つた。

そんな風で、とうとう新太郎ちゃんは上にあげて貰へなかつた。

惣兵衛ちゃんは外で紙鳶を揚げたいと言い出す。紙

鳶が大きすぎて、惣兵衛ちゃんは揚げることができなかつた。代わつて、新太郎ちゃんが紙鳶を揚げた。しかし調子に乗つて紐を伸ばしすぎ、強い風に吹かれ、新太郎ちゃんは紐を離してしまつた。

新太郎ちゃんは自分が弁償するから「お父ちゃんにはいはんで」ときっぱりした声で頼んだ。栄蔵は新太郎ちゃんがあんな高価な紙鳶をどのようにして手に入れるのか、さっぱりわからなかつた。

銭といふものは、大人が儲けて大人が使ふのである。だから銭は大人の手から大人の手に渡るのであつて、子供には関係しないのである。時々子供はお使にやられる場合、一つか二つのお鳥目を持つことができる。それが、子供の銭と関係する唯一つの機会である。

しかし、謎は解けた。ある日、栄蔵が海に行くと、引き潮の中に膝まで浸かつた新太郎がいた。間もなく新太郎は陸にあがつてきた。

棒と思つたのは、鉄の熊手である。

「何を獲つた？」(中略)

新太郎ちゃんは、にこにこしながら、そばによつて来て、腰につけてゐる小さい籠を、のぞかせてくれた。中には、濡れてびんびんしてゐるえびが数匹はいつてゐた。

「これどうする？」(中略)

一軒の船宿のところへ来ると、新太郎ちゃんは、ここだよといふやうに、栄蔵の方へにこにこ笑つておいて、勝手口からはいつていつた。そして間もなく出て来ると、垢にまみれた猿みたいな掌を、ぱつと開いて、真中に四角な穴のあいたお鳥目を一つ見せた。

栄蔵は新太郎ちゃんにお鳥目が5つ6つ重なつたぜにさしを見せてもらった。紙鳶を買うにはこの10倍もの銭が必要である。しかし、栄蔵の心には希望の泉が湧きだした。

ある日栄蔵が松さんの代わりに米を搗くと、お母さんがお駄賃に大好物の石榴をくれた。

「お母さん、わたしは、お銭が欲しいのです。」

さういつて栄蔵は羞しさうにうつむいた。

お母さんは驚いた。栄蔵がお銭をくれなどいつたのは始めてだからだ。お母さんは栄蔵の顔をまじまじと見た。

「本でも買ふのですか。」

「いいえ。」

「それぢや、何にするのです。」

栄蔵はしばらく黙つてゐた。下唇をもぐもぐ嚙

みながら。

お母さんの眼には、急に栄蔵が大人になったやうに見えた。穏和おとなしかつたこの子も、こんなことをいひ出すやうになつたと思つた。

お金をねだることが栄蔵に恥ずかしく居心地の悪い思いにさせていた。

「あげないことはありません。でも何に費ふのですか。」

「いひたくないのです。」

お母さんは、またしばらく息子の顔をまじまじと見てゐた。この子を疑ふことは出来ない、と胸の中でいつた。

「どれほど入用？」

「乞食にあげる位で結構です。」

お母さんは、(中略) 栄蔵の手に、お鳥目を十ばかりのせた。

栄蔵は、新太郎に見られないように、錢さしに鳥目を通した。

栄蔵が惣兵衛ちゃんに明日新太郎と遊びに行くことを告げた。

「あんなもん、来ん方がいいな。」

と惣兵衛ちゃんがいつた。

「一緒に行きたいさうだから、いいぢやないか。」

「どして？」

「どしてつてことないけど……。」

その理由わけは、いへなかつた。惣兵衛ちゃんを驚かせてやりたかつたからだ。その方が、一層新太郎ちゃんの努力の、仕甲斐があらはれるといふものだ。

栄蔵が惣兵衛を驚かせようとしたのは、新太郎のためであった。同じ身分の惣兵衛よりも新太郎に好意を抱く栄蔵である。

栄蔵が新太郎と新しい紙鳶を持っていくが、惣兵衛は全く関心がない様子だった。栄蔵だけが家の中に呼ばれた。

「栄坊ちゃん、おいでよ。」

と惣兵衛ちゃんが家の中から呼んだ。きつと何か御馳走があるのだ。それを貧乏人の子、新太郎ちゃんには、やりたくないの、栄蔵だけを呼ぶのだ。栄蔵も新太郎ちゃんも、それがよく解つてゐたので、顔を見合はせると又新太郎ちゃんが、情ないやうな表情になつた。(中略)

お祖母さんは、貧乏人の餓鬼までついて来たので憎らしいといふ顔付をしたが、仕方がないので、

新太郎ちゃんにも、西瓜をくれてやつた。切れつぱしのところをちつぱり。

惣兵衛は、オモチャの弓で紙鳶を的にして矢を放ち破ってしまう。

——こんなことがあるものか。新太郎ちゃんが、あんな苦勞して買つて返した紙鳶を、見てゐる前で破つてしまふなんて。これには何かいけなひがある。(中略) 何か不合理なものがある。何だろう、それは。

かうして考へて見ると、こんな種類の不合理や不正が、世の中には実にたくさんあるやうに栄蔵には思はれた。子供達の間ばかりでなく、大人達の世界にも。(中略)

——どうして力のある人々は、力のない人々のことを思つてやらないのだらう。どうしてお金のある人々は、貧しい人々の氣持を察してやらないのだらう。……

世の中にある負の部分に気づき、特に貧富の差別に気づき、次の章で栄蔵が出家に至る動機に必然性をもたせようとしているのである。

VI 「寺にはいる」

ある日、光照寺に、すでに名主職を継いだ栄蔵がやってくる。

玄乗破了和尚さんが、玄関へ応対に出て見ると、若者は着白い顔をうつむけて、庭の梅の木の下にしよんぼり立つてゐた。

「どなたかのう。」

と和尚さんはきいた。

「出雲崎のもんです。」(中略)

「出雲崎と申すは何といふ家かのう。」

「橋屋です。」

「おお、橋屋か。それではあなたは若主人の……。」

「はい、こんど名主職を受継ぎました栄蔵です。」

前の章から年月が経っていることが分かる。そして、栄蔵の口からここに来た理由が語られる。

「わたしは刑場からやつて来たのです、今日一人の罪人が刑に処せられました。」

「(中略) お前さんは、又何故そんなものを見に行かれたのぢや。」

「罪人が私の町の者でした。私は名主として立合に出なければならなかつたのです。」

「さうか、出雲崎の者ぢやつたのか。」

「わたしはあの者を小さい時から知つてゐます。いかにも悪い人間でした。悪い人間でしたけれども、人間が人間の力であの者を処刑してしまつていいのでせうか。可哀さうです。あんまりです。」

このエピソードは、西郡久吾の『全伝』の記述を根拠としている。しかし、南吉は、殺された罪人が良寛の知り合いという設定を付け加えることで、良寛の出家の動機をわかりやすいものにしてゐる。

和尚さんのお経を聴くうちに、栄蔵の心も落ち着いてきた。そして、和尚に「わたしも僧にして下さい。ここに置いて下さい」という。和尚は一時の感動だと言つてなだめるが、栄蔵は前から僧になりたかつたと告白する。

栄蔵は、家のことを心配する和尚さんに、家は13歳の弟にまかせればいいこと、父も許してくれるだろうことを話し、説得し、強引にその日のうちに出家してしまつた。

翌日、栄蔵は僧の姿で家に帰つてきた。

ひとときがすぎて、一切を両親に許して貰つた良寛さんが、再び光照寺へ、戻つてゆく姿が街路の上に小さく見えた。

越後の冬ははやく訪れるので、海から来る風はもう道や畑を白くして吹き、良寛さんの剃りたての青い頭は、雪をふくんだ雲の下で寒かつたのである。

栄蔵がお父さんとお母さんに「今日からわたしは良寛です」と名乗つて以来、栄蔵は「良寛さん」と表記されるようになる。

VII 「円通寺で」

良寛は、故郷や家の人々に別れを告げ、遙かに遠い備中玉島へ旅をすることになる。

越後の海は、冬、暗い雲にとざされ、北から来る風が波を捲起した。波は怒つた牛どものやうに狂ひたち、海岸の巖に向かつて体をぶつつけ、昼も夜も深い呻き声を絶たなかつた。また風は、海岸の砂や小石を吹きとばして、海に近い家々の窓や戸を叩くのであつた。そしてやがて雪がやつて来ると、一層状態は悪くなつた。雪は風と共に家々の上に狂ひまはり、小さい隙間を見つけては、家の中へはいりたがるのであつた。(中略) 越後の子供達が、雪を喜ばないのは当然だつた。彼等はかう歌つて雪を嫌つた。

ぼたぼた。雪降るなや、
浜のかかが泣くとや。

これに対して、玉島の冬は。

玉島は冬も温いところであつた。海はいつも異人の眼のやうに、やさしく碧くたたへられ、陽は入江や、入江をとりかこむ丘の上にみち溢れた。(中略) 雪はめつたに降らなかつた。降つても少かつた。大きい白鳥が羽搏いて過ぎるときに、落としてゆく羽毛ほどだつた。で、このあたりの子供達は、雪を見るとかう歌つて喜んだ。

雪は殿様、
雨は草履持。

円通寺にやつてきた良寛は、むきになって真理を求めていた。誰よりも早く起きて座禅し、国仙和尚のもとにおもむき問答をした。しかしなかなか真理をつかむことができなかつた。

このあたりの描写は、良寛自身の詩「円通寺」を踏まえている。これをヤコブ・フィッシャーが『蓮の露——良寛の生涯と芸術』で以下のように訳している。英語に堪能な南吉は恐らくこれを参照したものと考えられ⁽⁴⁾。

日々——夜がしらみはじめるとすぐに——

まだ同僚が起きないうちに——

禅堂にただひとり坐して、

何時間もただ一心に、何ものにもとらわれず、はかないわが身と人生の真の意義をじつと考えていた。

また、怠け心がわが道に忍びこんだときには、敬愛する禅師の賢明な教えに一心に耳を傾け、見て、感じて、知つたのであつた

ある日、良寛は国仙和尚にいわれて、米を搗いた。すると杵の音を聞いていた国仙和尚は良寛の心の中の不満を指摘した。

「わしのいふ通りだらう。」

「はい。」

「馬鹿ものめが。」

「はい。」

「大馬鹿ものめが。」

「はい。」

国仙和尚はそれだけいふと、ついと立つて奥へ行かうとした。良寛さんは慌てて、

「師ツ。」

と呼びとめた。

ここには禅問答の雰囲気が見られている。以下の部分もそうである。

「私はいつまでも、こんなことをしてよいかと思ひます。いたづらに齢をとるばかりで、いつまでたつても、もとの榮蔵に変わりありません。」
 「……。」(中略)
 「しかし、ここへ来てから、もう四年にもなりますのに、わたしはその真理どころか、真理のかげさへ見えないのです。」(中略)
 「どこに真理があるか、私はそれを知りたいのです。」
 「わしは知らん。」
 と始めて国仙和尚が口を開いた。

国仙和尚は良寛に、仙桂和尚のところに行くようにと言った。良寛はさっそく出かけることにした。

良寛さんが山門を出て来ると、そこには三、四人の女の子がゐた。良寛さんを見ると中の一人が、
 「あつ、いいところ良寛さんがおいでだ。」
 といった。
 良寛さんは暇なとき、よくこの子達とおはじきをしたり、手毬をついたり、雪の国、越後のお話を、きかせてやつたりして遊ぶので、女の子達から親しまれてゐた。

良寛は女の子に、枝に載ってしまった手毬を取ってくれるよう頼まれた。しかし良寛は忙しいからと断り足早に去っていった。

寺に着くと、百姓のような様子をした仙桂和尚がいた。張りつめた心がいっぺんに弛んでしまった。仙桂和尚は、これから菜の花の束を20ほど作り、町へ出かけるという。

「いつ時分帰つて見えますか。」
 「さうよなア、晩にや帰つて来るがな。いや解らん。酒でも飲まされると、途中で寝ちまふことがあるで。」
 まだ日は高いので、晩まで待たされるのは大変だと、良寛さんは思った。
 「そんなに待つちやゐられません。」
 「そいぢや、お前さんもついて来るか。」
 良寛さんは、いつの間にかのどかになつてしまつてゐた。もう、何のために円通寺からここへやつて来たかも、忘れてしまつた。

町で仙桂和尚と良寛は、1人の美しく盛装した坊さんに会った。こういう坊さんほど中味が薄いことを良寛は知っていた。しかし、仙桂和尚はその坊さんに深く丁寧にお辞儀をした。

「あれは何方ですか。」
 と良寛さんは呆れてきいた。
 「知らんて。いづれ、その辺の坊さんだらう。」
 と仙桂和尚は、けろりとしてゐた。良寛さんはますます呆れた。
 「よその宗派のわけのわからぬやうな坊主に、あんなにいていねいにお辞儀するのですか。」
 「うん。」
 と仙桂和尚は笑つていつた。「自分で偉い気であるのだから、お辞儀しておけばいいのだ。」

良寛は仙桂和尚のこだわりのない姿に惹かれ、来るときは反対に、温かい満ち足りた気持ちで帰途に就いた。

山門の前には、まだ女の子達がゐた。もう毬のことはあきらめて、石段の上でおはじきをしてゐた。
 「毬とつてやらうか。」
 と良寛さんは女の子達にいつた。
 良寛さんは、あまり木のぼりは、うまくなかつたので、なかなか骨が折れた。枝をゆすつて毬を落して下りて来たときには、衣は破れてゐた。足には擦りむき傷が出来てゐた。

真理を追い求めていたときの良寛とは違う良寛がいる。真理と一体となった良寛がいる。

VIII 「ふたたび故郷へ」

良寛は円通寺に戻って、国仙和尚に誉められるほどに修業を積んだ。44歳になった。

或日、国仙和尚は、良寛さんのことを詩にうたつて良寛さんに見せた。それには、「良寛は馬鹿者のやうに見えてゐて、なかなか心が寛い。少しもこせつかないで、運命のままに身をまかせてゐる。いつどんなどころでも、居眠をすることが出来る位、心には、余裕と落着がある。」といふ意味のことがうたはれてあつた。かうして良寛さんは、師にも褒められるほど修業を積み、誠の道の奥深くはいつていつたのである。

ある日、良寛は1通の手紙を受け取つた。それは、知らない人から送られたものであつた。

良寛さんは、最初から読んでいつた。水のやうに静かな態度で、しまひまで読んでしまつた。読んでしまふと、しばらく開かれた手紙を、手拭のやうに、両手の上にひろげたまま、ぼんやりして

みたが、やがて捲きかへした。

良寛さんは、大して持物とはなかつた。身のまはりのものを、すっかりまとめると、小さい風呂敷包が出来るくらゐであつた。良寛さんは、それをつくつた。

それは父親が死んだという知らせだつた。良寛は国仙和尚のもとへおもむき、高野山、京都を経て、生れ故郷へ行くことを告げた。

良寛は京都に着き、手紙をくれた人物に会い、形見をもらった。それは、一枚の半折と、一枚の短冊であつた。

しかし良寛さんは、父のかたみが、この二枚の俳句だけかと思ふと、あつけなく思はれた。

「何か、着物でも残してくれなかつたでせうか。」ときいた。(中略)

「みんな申しあげませう。実は以南さんは、桂川に身を投げてなくなられたのです。」

「えッ。」

あまり意外な言葉に良寛さんは、びつくりした。しばらく言葉が出なかつた。そして僅かな時間のすぎる間に、一切のことが良寛さんにわかつた。しかし、それを良寛さんは口に出さなかつた。

良寛は父の入水自殺に驚いたが、心当たりがあつた。

良寛さんは小さかつたとき、父からよくきかされたお話を憶ひ出す。

——昔、日野資朝すけともといふ公卿くぎょうさんがあつた。わるい賊共が勢をふるつて、天皇さまは、山の中へ住まひしていらせられた頃であつた。資朝は、そのやうな世の有様をなげいて、天皇さまのためにことを計つた。しかし計画は実行されぬうちに、賊共に嗅付けられ、資朝は都を遠く佐渡ヶ島へ流された。流されたばかりでなく、数年ののち、賊共の手にかかつて死んでしまつた。お前が毎日見てゐる、あの佐渡ヶ島で……。

良寛は「父の志に、こつそり自分の志を、合はせるやうになつてゐた」。

良寛は托鉢しながら、20年前と同じ道を逆に向かつて歩いた。大きな希望をもっていた20年前とは異なり、今は、「世の数々の苦しみを知」り「胸には何の希望もない」のであつた。20年間自分は何もしなかつたと恥ずかしく思った。

——何もしなかつたどころか、父上母上に不孝をした。父上母上は、わしが「学問をして、きつ

と偉くなります。」と申しあげたとき、こんなつまらない雲水坊主で一生を終るとは思はれなかつたらう。母上は、わしが今にきつと偉い僧侶になると思ひながら、死んでゆかれたのだらう。父上はきつと、わしが父上の志をついでゆくと思はれただらう。

——いや、ほんたうに、わしは能なしぢや。こんな能なしは人の世の片隅に、こつそり生かして貰ふより仕方がない。こつそり片隅に生かして貰はう。

この部分について、茂倉利三は以下のように述べている⁽⁵⁾。

この述懐はまさにおちぶれて故郷にかえる敗残者のものではないでしょうか。こんなつまらない雲水坊主ならだれが相手にしてくれるでしょう。それこそ子供にも石を投げられて馬鹿にされるだけでしょ。このあたり淋しいという言葉が何度も何度もでできます。良寛さんは仲間はずれにされた子供が、遠くの方からそつと子供たちの輪を窺っているように、人間の世界に憧れつづけた、そんなめそめそした坊さんだつたでしょうか。

しかし、南吉は良寛を「敗残者」として描いているわけではない。この場面は、出家して修業に出るとき、高揚した、真理を体得しようと意気込んでいた良寛の姿と対照的に、ありのままに生きようとする謙虚な姿を描いているのである。とくに、戦争の真っ直中で、天皇を中心とする国家思想が盛んに唱えられていた時期である、父の勤皇思想を受け継がず、「能なし」のように「こつそり片隅に生かして貰」うという南吉の考えは、時局に対する批判的な姿勢を示すものとも言えよう。

IX 「五合庵で」

良寛は、五合庵という国上山の中腹にある小さい庵に住みはじめた。良寛の生活は質素なもので、ひつそりと、しかし修業を怠らず生活していた。

『全伝』によれば、良寛が五合庵に住むようになったのは、48歳の時であつたという。南吉は『全伝』に記されたその後の経緯をすべて省略して、ただちに場面を五合庵へと転換させている。

五合庵といふ名は、どうしたわけだらう。その頃から百年余りも前、萬元まんげんといふ偉い坊さんが、大きな仕事をしとげたあと、隠居するためにその庵を建てた。そして萬元和尚は、毎日お米を五合づつ頂いて、それだけでその日その日を送つたので、五合といふのを庵の名にしたのである。だから五

合庵といふのは質素な家といふことになる。

南吉は五合庵の名前をとくに良寛の質素な生活と結び付けている。

五合庵は寂しい。
つるした石の楽器のやうに頼りない。
外は杉ばかり、
壁にかかつてゐるものは詩ばかり。
お釜の中には塵が積つて、
かまどに煙の立たぬ日が多い。
だが東の村には友達がある、
月夜になると訪ねて来る。

これは良寛の「五合庵」という詩を南吉が訳しものである。

朝、良寛は庵の裏の小さい泉で顔を洗う。そしてそのあと佐渡ヶ島の見えるところまで歩く。

「お母さん、お早うございます。」

さういふ心持で良寛さんは、佐渡の方に頭を下げた。良寛さんはこの頃では、お母さんがそこで生れて、少女の頃を送つたといふ佐渡ヶ島が、お母さんその人を見るやうに、懐しく思はれてならなかつたのである。

それから良寛さんは、少し方向をかへて西南に向いた。そして、ていねいに頭をさげた。いくつかの山河と、いくへかの雲の奥に、皇居があらせられるのである。そしてまた京都は、勤皇の志を遂げることが出来ず、憤慨して死んだ父の、最後の場所でもあつた。

良寛は庵に戻ると米をとき、かまどにかけた。焚き物は良寛がかきあつめた、松葉や枯れ芝であつた。

燃えるとき松葉はよい香を發し、その炎も何だか他のものの炎より、美しいやうに思はれる。かうしてゐると、ついこの静かなみちたりた自分の生活を、詩か歌にうたつて見たくなるのである。

お金がほしい御馳走がほしいと
思はないので心は満足だ。
あれがほしいこれがほしいと
思へばきりがなく、しまひには苦しくなる。
粗末なたべものでも
お腹はくちくなる。
粗末な衣でも私は
これでよいのだ。
寂しければ山にはいつて
鹿と遊ぼう。
また村に下つて

子供達と一緒に唄を歌はう。
ときどき泉の水で
耳を洗ふのだ。
すると松風の音は
一層すがすがしい。

かういふ意味の詩が、御飯の炊けるまでに良寛さんの頭の中で、ちゃんと出来あがっているのである。この詩のもとになる漢詩を示す。

無欲一切足	欲するなければ、一切は足る
有求万事窮	求むるあれば、万事は窮す
淡菜可療饑	淡菜、饑を療すべく
衲衣聊纏躬	衲衣、いささか躬に纏う
独往伴麋鹿	ひとり往く、麋鹿を伴い
高歌和村童	高く歌う、村童に和し
洗耳岩下水	耳を洗う、岩下の水
可意嶺上松	意を可とす、嶺上の松

縁の下に筍を見つけた良寛は、国上寺の寺男に鋸を借りて縁側の板を切り取った。

間もなく、麓の村へ使にゆく国上寺の寺男が、五合庵に立寄つた。

「良寛さん、筍はうまくいきましたかな。」

「ああ、うまくいきました。」

と良寛さんの声が庵の中からした。

寺男は縁側を見てびつくりした。切られたのは筍ではなくて、縁側であつた。筍の頭の触るところが、四角に切りぬかれていた。(中略)

「それなら筍も、せいせいしただらうの。わしも頭が軽くなつた。そいつの頭が縁側につかへてゐるうちは、どうも他人事のやうな気がせんでのう、わしも頭を誰かに抑へつけられてゐるやうな気がしてをつた。」

この筍のエピソードは、西郡の『全伝』ほか、松本、フィッシャーなどにも取りあげられているが、良寛に「わしも頭を誰かに抑へつけられてゐるやうな気がしてをつた」と言わせているのは、南吉の創作である。

半月たつと、筍は屋根の上に頭を出していた。

次の日、弟の由之が馬でやってきた。初老に達しており、もう家には名主職見習いの馬之助という息子がいる。

由之も縁側の竹に驚き、「たかが一本の竹なんかのために」縁側や屋根に穴を開けてしまった良寛に呆れた。

何か不自由があればという由之に、良寛は次のように答えた。

「うん、有難う。でも今のところ何も不自由はない。わしは、これで満足してゐる。あたりは静かで心を乱すものはない。よい大気は自由自在に吸ふことが出来る。水は泉でいつも湧いてゐる。寝てをつても鶯や、ほととぎすのいい声を聞くことが出来る。托鉢にゆけば、みんなが米をめぐんでくれる。子供達は喜んでわしと遊んでくれる。春には花が咲き、秋には紅葉がわしの眼を、たのしませてくれる。何といふ有難いことだ。何一つ世の中のために出来なかつた、わしのやうなものには、ほんたうに勿体ない位だ。だから、わしはこれ以上何も望まない。何でも有難いと思つて生きてゐる。」

由之は30分ほど世間話をして帰っていった。由之はこの頃面白くない日が続き、家にいても気がくしゃくしゃするので、兄の良寛に相談に来たのであった。

——しかし、筈をのばしてやるために縁側や、軒端に穴をあけるやうな兄さんに、相談したつて何になるもんか。まだそこにつないである牛に、相談した方がいい位だ。

この考に可笑しくなつて、由之さんは一人で笑つた。(中略)

よく考へて見ると、由之さんの今の苦しみも、欲が深すぎるところから始つてゐた。(中略)

——こいつは確に、私のやり方が間違つてゐた。やつぱり兄さんは、私に教へてくれた。さうだ、やつぱり兄さんは偉い。

由之さんは顔を明かるくして、あたりを眺めた。急に世の中が、美しくなつたやうに見えた。

X 「手毬」

良寛と子供たちの遊びについては解良叔問の末子栄重の書いた『良寛禅師奇話』に言い伝えがある。この章は、これを踏まえて展開されている。

良寛は、米がなくなると、山を下りて、托鉢するが、この頃では忘れっぽくなり、持ち物を紙切れに記すようになった。

それには、おほよそかう書いてあつた。
 頭巾、手拭、扇子、手毬、おはじき、
 笠、脚絆、手甲、杖、掛絡、
 桐油、鉢、囊、
 庵を出るとき、これをよく読まぬと、先できつと不自由するなり。

この書き付けは、先の松本によると、西蒲原郡吉田

町粟生津の鈴木家に珍藏されているという。そこに「手毬、おはじき」とあるのに注目して、南吉は物語を展開している。

良寛がときどき訪れる地蔵堂町の子供たちは、他の村の子供たちと違う、特別の歓迎方法で迎える。今日も良寛は地蔵堂町へやってきた。子供たちが遊んでいた。

「はい、こいつはしまつた。今日はここへ来るのぢやなかつた。」

といふのは、良寛さんは今日、新調のお衣を着てゐたのである。(中略)それは歩くたび軽く爽かな音をたてる、よいお衣であつた。

「悪いことに、雨あがりと来てゐる。」

良寛さんは地面を見た。どこもかも少しぬかつてゐた。

「ここへひつくりかえつちや、衣はだいなしにならうて。」

しかし良寛さんは、今更ひきかへすことも出来なかつた。といふのは、もう一つ新調のものが、良寛さんの懐中^{ふところ}にあつた。手毬だ。

良寛は、今日はひっくり返るのは止めようと決めて、辻堂の方へ行つたが、5、6人の女の子達にいつものように「良寛さん、一貫」と言われると、そのままいつものように、うしろに尻餅を付いた。

——やれやれ、子供といふ奴は、しやうのないもんだ。さう口の中でいひながら、良寛さんは腰をあげた。そして、そのしやうのない子供が、良寛さんは好きだつた。

それから、良寛さんの待ちのぞんでゐた手毬つきが始まつた。良寛さんは、初めのうち新調の手毬を出さなかつた。(中略)

——なあに、今にわしの毬を見せてやるから驚くな、と心の中でいひながら、良寛さんは一人でこつそり笑つてゐた。

良寛がつきそこなつたとき、どこかで鶯の鳴き声があった。「鶯が鳴いている、秋だというのに」と良寛が言うと、「そうじゃない、キクやんが鶯笛をふいとるの」と女の子が言う。

「どうして、あの子は一人で、鶯笛なんか吹いてゐるのかい。ここへ来て一緒に遊ばないのかい。」と良寛さんは、毬をついてた女の子が、つきそこなつてやめたとききいた。

「でもキクやん、おつ母さんがないもの。」

「おつ母さんがなくても、ええぢやないか、一緒に遊べば。」

女の子達は、ちよつと顔を見合はせた。
「だつてキクやん、毬がないだもの。」
と一人の子がいつた。(中略)

ここで手毬をついてゐる子達は、あの、母さんのない子を軽蔑してゐるのだ。——この子供達は、大人達でもよくさうするやうに、憐れまねばならないものを間違へて軽蔑してゐるのだ。さう良寛さんは思った。

良寛はその子を手招きした。

「お前の鶯笛はいい音がするね。ンでも今時分鶯笛を吹くのは可笑しいの。わしのこれと取りかへつこしよう。」

さういつて、良寛さんが懐中から出したのは、昨日半日かかつて造りあげた手毬だつた。(中略)
「さア、遠慮なくおとり。」

その子は、良寛さんの大きな眼にたたへられた、やさしい慈愛の色を見た。そこで手毬をそつと取ると、良寛さんの掌の上に、まだ濡れてゐる小さい鶯笛をのせた。

さつきから、毬つきをやめて見てゐた女の子達には、良寛さんのしたのが正しいことであると、すぐわかつた。自分達は間違つてゐた、人はかういふ風にして、いたはり合はねばならないのだ、と心の奥ではつきりわかつた。

「わしに鳴らせるかな。」

といつて良寛さんが、下手に鶯笛を吹くと、みんなはわつと笑つた。毬を貰つた子も、はじめて笑つたのである。

XI 「亀田鵬齋先生の訪問」

ある時、亀田鵬齋という偉い学者が江戸から長岡へやつてきた。

亀田先生は、今までにあまり見たことのない、立派な文字を見つけた。そこで自然に足がとまつてしまつた。

それは道ばたの一軒の大きな商家が、^{あかりしょうじ}明障子の上に貼出した広告の文字であつた。太い筆でかう書いてあつた。

「酢、醤油、上州屋」

何といふ美しい文字だらう。見れば見るほど好きになる、温い、優しい、そしてりんとしたところのある文字だ。心の美しい、立派な人でなければ書けない文字だ。

鵬齋はこの文字が誰の筆になるものかを聞こうと上州屋に入り、名を名乗ると、「へつ、あなたがあの御

有名な亀田鵬齋先生！」と店のものは驚く。

鵬齋はそれが良寛の筆になるものだだと聞くと、深く感心した。

「いや、良寛禅師の書を、あんな風におもてにさらしておくのは、勿体ないことです。あれは、おしまひになる方が、いいと思ひます。」

「でも、あれは、うちのかんばんですから。」

「何なら、わたしが代りに書いて上げます。わたしの字位が、ちやうどかんばんにするには恰好です。良寛禅師の書など、あんなことをしておいては罰があたります。」

鵬齋は代わりに自分で書を書いた。

尊敬の念を抱いた鵬齋は、山道のわきに小さい庵を見つけ、良寛の家の場所を尋ねた。

「良寛のゐるのはここですが。さうしてこのわしが即ち良寛ぢやが。」

と、顔の長い身すぼらしい坊さんが、つくねんと部屋の真中に坐つたまま答へた。

亀田先生はびつくりした。もつと立派な住まひにゐると思つてゐたのである。——自分の書く文字でもかなりよい値段で売れる。良寛禅師は、あれほどすぼらしい字を書かれるのだから、懐中工合は悪くない筈だ、堂々たる家を建てて住んでゐる筈だ、と思つてゐたのである。

良寛は鵬齋を家にあげ、足を洗うようにと器に水を入れてきた。

「これはあの、^{すりばち}播鉢ではございませぬか。」

と草鞋のひもを解きかけてゐた亀田先生は、また驚いてきいた。

「ああ播鉢ぢや。」

「播鉢と申して、あの味噌を播る味噌播鉢ではございませぬか。」

「味噌播鉢ぢや。」

「いや、あきれました。それではこれで足を洗ふことは出来ません。」

「いや、相済まぬ。わしのところは貧乏で、^{たらい}盥だの桶だのいふものがないので、大方のことはこの播鉢で間に合はせませぬぢや。」

これは『全伝』に見えるエピソードであるが、これを鵬齋との出会いの場面に使用したのは南吉の創作である。南吉は、良寛に関わるエピソードを効果的に配置して、この物語を構成していることがわかる。

話を始めると、2人の話は尽きるところがなかった。途中、鵬齋は良寛に字を書いた短冊や半折を何故売ら

ないのかと聞いた。

「さういふことは、しようと思つたこともありませぬのう。わしは、みなさんから物を恵んで頂いて、不自由なく暮らしてゐますから、わしの方でも、欲しい人には、字を書いてさしあげますのぢや。もつとも、自分の気分が悪いときは、書けませんの。」と答へた。

また亀田先生が、
「一つ、江戸へ出て来られてはいかがですか。(中略)」

と誘ふと、良寛さんは、
「いや、わしは、ぱつと有名になりたくありませんのぢや。わしは、何一つ世のためになるやうなことは出来なかつた、ほんとの能無しぢやから、この山の中に、こつそり暮させて頂けるさへ、有難いことと思つてをりますぢや。」
と答へるのであつた。さういはれると亀田先生は、もう何もいふことがなかつた。

夜になって、良寛は酒を買うために麓の村までいくことになった。しかし、良寛はなかなか帰ってこず、鵬齋は待ちくたびれてしまった。

鵬齋は良寛を迎えに出かけた。松の木の根元に腰を下ろして良寛は月を見ていた。鵬齋は声を掛けた。

「ああ。わしぢや。見られい、いい月ぢや。いい月ぢやのう。」

と、良寛さんは、月から眼を離さなかつた。
「いい月ですね。月もいいですが、酒は手にはありませんか。」

と亀田先生がいふと、良寛さんはとむねをつかれたやうに、はつとして、そばにおいてあつた徳利を掴むや、さあつと麓の方へ走り出した。良寛さんは月に見惚れて酒のことを忘れてゐたのである。

——いや、どうも、と残つた亀田先生は苦笑しながら思つた。——天下の亀田鵬齋が、待たされて忘れられたのは、これが最初だ。良寛禅師にかかつちやかなはない。

鵬齋は「それで、ますます良寛さんが好きになり、尊敬もした」。

最後に、上州屋に書いてやった広告の後日談が付されている。

その後、或日また、一人の通行人が、上州屋の「酢、醤油、上州屋」に目をとめた。

その人はかういつて、上州屋にはいつて来た。「障子の表に貼つてあるのは、亀田鵬齋先生のお手と見受けたが、さうではないか。」

それは巻菱湖といふ、やはり字のうまい人であつた。

巻先生は、亀田先生が良寛さんの字に対して、いつたのと同じやうなことをいつた。(中略) 亀田先生の「酢、醤油、上州屋」は、しまはれて、巻先生の「酢、醤油、上州屋」がかかげられた。

しかし巻先生の「酢、醤油、上州屋」も、あまり長く通行人に見て貰ふことはできなかつた。

やがて富川大晦といふ、これも書道の先生がやつて来て、巻先生の「酢、醤油、上州屋」をしまはせ、自分の書いた「酢、醤油、上州屋」をかかげさせたからである。

XII 「董」

べつだん良寛さんは、人が驚くやうな大きな仕事をしたわけではなかつた。良寛さんの偉さはじみで、目立たなかつた。ちやうど眼に見えないほど細い糸で、しみじみと降る春雨のやうに。春雨は土を黒くうるほし、草や木を芽ぶかせてやる。良寛さんの人がらも、その周囲の人々の心をうるほし、うはつてゐた心をしつとり落着かせ、知らぬ間に希望と喜びの芽をふかせるといふ風である。

世間で偉いといはれてゐる人々の中には、なるほど固い意志の力を持つて大きな仕事をなしとげはするが、人間らしさを持たないといふ人もないではない。しかし良寛さんはそんな人とは違つてゐた。良寛さんは、飽くまで人間らしさを失はなかつた。

ある日、良寛は懇意にしている人の家を訪ねたが、留守だったので、ほんやりと野道を歩いていた。

良寛は傍らに鉢を置いて、董を摘み始めた。夢中になりすぎて、気づくともう日暮れだった。良寛は野道を急ぎ足で行った。村へ来ると、良寛は董の花をあげようと子どもを探した。

——それにしても、何故、わしはこんなことをしたのだらう。こんなに董を摘んで、一人一人子供にあげようといつて……。良寛さんは、もう夕闇で黒く見える董の花を見ながら考へた。けれど、はつきりとは解らなかつた。

良寛さんは、とほとほと五合庵の方へ歩いていつた。足が大層重かつた。

——子供達は、日暮になると、みんな勇んで家へ帰つてゆく。しかし、わしは自分の家へ帰るといふのに、ちつとも楽しくはない。わしの家には、誰もわしを待つてゐるものがないからだ。

間もなく、顔見知りの「百姓」がやってきた。良寛は急に元気が出て、立ちあがった。その人は良寛が忘れたお鉢を届けてくれたのであった。

良寛はその「百姓」をむりやり家に上げた。

良寛さんは、しきりに百姓をひきとめたがつた。

百姓は五合庵の中を見まはして、「良寛さんは、こんなところで、毎日毎晩、暮してをらつしやつて、よくも寂しくねエもんですな。」といった。

「ああ、それさ。わしも今外から帰つて来て、つくづく自分でもさう思つてゐたところさ。こんなところによく一人でゐたもんだとのう。」

「島崎村の木村の旦那がいつてをらつしやつたが、あそこの屋敷の中に小さい離があるさうで、よかつたら良寛さんに、はいつて貰ひたいげなが。」

良寛は実際、死ぬまでの6年ほどの間を、島崎村の木村家の別舎で生活しており、隆泉寺境内にある木村氏の墓地に葬られている。

「百姓」が帰ってしまうと、良寛の気分はまた沈んだ。

今は、はつきり解つた。良寛さんは人が恋しいのだ。一人であるのは寂しいのだ。

——若かつた日、わしは寂しさに耐へる修行をした。どんな寂しさでも平気でゐられるやうに努力した。そしてあの時分は、それも出来た。しかし、年をとつたのか、わしはまた寂しさが我慢出来なくなつて来た。結局、わしは、一人ぼつちではゐられない弱い人間なのだ。

良寛は麓の山を見ようと外に出た。空には一群れの鳥が西の方に向かって飛んでいくのが見えた。

一羽遅れた鳥が、落伍しまゐりとして、一生懸命に追ひすがつてゆくのが見られた。そしてすぐ見えなくなつてしまつた。

——わしら人間も、あの鳥共と同じだ、と良寛さんは思つた。——わしら人間も、一人ぼつちでは、生きてゐられないのだ。みんなが一緒になつ

て、お互に助け合つて生きてゆくのだ。(中略)

——わしは、あそこへゆかう。島崎村の、わしを迎へてくれるといふ家へたよつてゆかう。一羽遅れた小鳥のやうに、わしは人々のところへ追ひすがつてゆかう。

良寛さんの眼からとめどなく涙が溢れ、平野の家々の灯はうるんで一つに見えた。

この終結部について茂倉は以下のように批判している⁽⁵⁾。

これはいかん。感傷に過ぎる。こんな良寛さんでは、一体、二十年の修業遍歴、二十年の五合庵の独居孤坐は何だったのだろうか。結局、淋しさに涙をぼろぼろこぼすような弱い人間だったとしたら、良寛さんの一生に何の価値があったのだろうか。そんなことはない。良寛さんはどんな孤独、どんな苦難にも耐えることのできる強い人間だったはずだ。

しかし、南吉は、良寛が最後の日々を木村家の別舎で過ごしたという史実を踏まえ、その心境を空想しながらこの場面を構想したのであり、それは、あるがままにすべてのものを認めるといふ良寛の到達した心境にもっとも適したものであったといふことができる。

註

- (1) この点については拙稿「音読による授業構成の試み——樋口一葉の後期作品」(『教養と教育』第5号、2005年)を参照されたい。
- (2) 南吉は1939年10月『ハルピン日日新聞』に「久助君の話」を掲載し、その後『新児童文化』1940年12月号に「川」、同1941年7月号に「嘘」など、久助君を主人公にした作品を発表している。
- (3) 茂倉利三「私論「良寛物語」——南吉文学の限界」(『花のき』1993年)参照。
- (4) ヤコブ・フィッシャー『蓮の露——良寛の生涯と芸術』1937年。近藤敬四郎、若林節子訳、1992年、研究社。
- (5) 前掲茂倉論文参照。
〔付 記〕本稿を制作するにあたって、石田智子氏の愛知教育大学哲学教室2000年度卒業論文「新美南吉の『良寛物語 手毬と鉢の子』にみる思想」を踏まえている。文責はすべて本稿筆者(渡辺)にある。

(平成17年8月29日受理)